



「アートホラー」はもともと快い : ホラーのパラドクスを構成主義的情動理論で解決する

八坂, 隆広

(Citation)

美学芸術学論集, 19:80-110

(Issue Date)

2025-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100489955>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489955>



「アートホラー」はもともと快い

——ホラーのパラドクスを構成主義的情動理論で解決する——

八坂隆広

Takahiro YASAKA

はじめに

本稿の目的は構成主義的情動理論を用いたホラーのパラドクスの新しい解決方法を提示することである。日常生活において、大方の人は積極的に危険に身を晒して恐怖を経験しようとしめない。夜道で猪に出会えば別の道を使うし、車がよく通る道では信号を無視しない。こうして猪や事故といった恐怖の対象から自らを遠ざけることで、恐怖を回避している。しかし、フィクションによる恐怖においては話が違ってくる。映画や小説などのホラーフィクションは鑑賞者に恐怖を与えるものであり、鑑賞者もそのことを知っている。その上でホラー映画は毎年何作品も公開され、多くの人が足を運んでいる。恐怖が忌避されるものであるならば、ホラーフィクションを鑑賞する人がなぜ絶えず存在するのか。この矛盾に付けられた名が「ホラーのパラドクス」である。

この問題は北米の美学者ノエル・キャロル（一九四七）が一九九〇年の『ホラーの哲学：フィクションと感情を

めぐるパラドックス』で提起したもので、アリストテレスに始まりデュボスやヒュームにも論じられた「悲劇の快」に関わる議論を背景にしているという意味でも、人間とフィクションについての根本的な問いである。このパラドックスはとりわけ二〇〇〇年代後半以降、神経科学を応用した心理学理論を用いての解決が試みられているが、心理学理論の側にも常に進展があるために、パラドックスの解決法にも更新が求められることになる。そのなかの一つに、本稿で取り上げる構成主義的情動理論がある。この理論は、感情心理学者リサ・フェルドマン・バレットが旗手となつて提唱しているもので、情動が生得的な刺激－反応モデルによつて生成されるという従来の説を否定し、代わりに、情動は概念として、環境や文化の影響を受けながら後天的に作り上げられていくと主張するものだ。本稿のねらいは構成主義的情動理論をキャロルの議論に導入し、その利点を明らかにした上で「ホラーのパラドックス」の新たな解決法を示すことにある。

以下、第一節でキャロルによる議論を概説したうえで、第二節ではそれが持つ三つの問題（「認知／評価説」の問題、アートホラー概念の問題、パラドックスの解決法の問題）を示す。続く第三節で構成主義的情動理論を概説したのち、第四節で先に挙げた三つの問題を構成主義的情動理論によつて解決する。

1 『ホラーの哲学』概要

本節では、ノエル・キャロルによるホラーフィクションに関わる二つのパラドックスの提起とその解決が、いかにしてなされたのかを概観する。

キャロルは『ホラーの哲学・フィクションと感情をめぐるパラドックス』において、二つのパラドックスを提示した。

フィクションのパラドクスと、ホラーのパラドクスである。この二つのパラドクスについての議論を通してキャロルは、ホラーフィクションによつて観客に引き起こされる感情的反応、ひいてはフィクションと人間の感情の関わりについて考察している。

フィクションのパラドクスは、「なぜ虚構であると信じているものによつて心が動かされるということがあり得るのか」というものだ。これはキャロルによつて次の三つの命題が作り出す矛盾として整理されている。

- (1) わたしたちは本当にフィクションに心を動かされている。
- (2) わたしたちは、フィクションの中で描かれているものが現実のものではないと思つている。
- (3) わたしたちが現実であると信じているものだけが、わたしたちの心を本当に動かす¹。

パラドクスは、これらの三つの命題が全て成立すると仮定したときに起こる問題であるので、どれか一つを否定することで解決できる。キャロルは三番目の命題を否定する戦略をとる。つまり、私たちが現実であると信じていないものに対しても、私たちは心を動かされることがあるというのである。キャロルはこれを、「人は思考内容に恐怖することができ」ことで説明する。では、ここで言われている思考内容への恐怖とは何か。

例えば、東京スカイツリーの展望台で床が透明になっているところに立つて恐怖を感じている人がいるとする。その人ははるか高所から地面を見下ろせる透明の床を見て、自分が落下することを想像し、それによつて恐怖している。このとき、恐怖は身に差し迫った危険を対象としているのではなく、立っている場所が安全であることが分かった上

で生じる、「落下する」という思考内容を対象としている。キャロルはこうした場合の「思考内容」の内実を、「空間を急速に落ちていくという心的イメージ」としている。落下するという想像に伴う内容としてのイメージが恐怖をもたらすのである。キャロルはこの考えを、ホラーフィクションに対する恐怖の対象が作品に登場するモンスターであることと組み合わせる。つまり、ホラーフィクションを鑑賞することで生まれるモンスターについての思考内容が恐怖の対象であり、この恐怖は真性の感情であると主張するのである。

ホラーのパラドクスは「人はなぜ忌避感を与えるものに惹かれるのかという問題に帰着する」とまとめられる。ホラーフィクションはその主な目的と機能のひとつに、鑑賞者に恐怖を与えることをもつ。そのために、ホラーフィクションは不安や拒否感を与えるものを用いる。こうした感情を喚起するものは、通常私たちに忌避感を与えるはずだ。ではなぜ、そうしたものを求めることがあり得るのか。このパラドクスを解消するために、キャロルはホラーフィクションが鑑賞者に与える快に訴える。つまりホラーフィクションが与える快が、恐怖や嫌悪を補ってあまりあるというのである。そしてその快はプロットが与える認知的快である。ホラーフィクションのプロットは超自然的なモンスターをめぐるものであり、プロットの各段階において、「主人公たちはモンスターを打ち倒すことができるか」といえることができるか」や、「モンスターの正体は何か」また「主人公たちはモンスターを打ち倒すことができるか」といった問いが提示され、それが解決されながら物語が進行する。このことによつて鑑賞者は認知的快を得ることができる、それが恐怖や嫌悪を補償するものになっているというのがキャロルの主張である。

2 『ホラーの哲学』の三つの問題

本節では以上に紹介したキャロルの議論に関する三つの問題を指摘する。一つめはキャロルが依拠した心理学理論についてのもので、二つめはこの議論がどのような方法で批判されてきたかに関わるものである。そして三つめは、パラドクスの解決法についての問題である。

2-1 「認知／評価説」問題

キャロルはパラドクスを解決する前段階に、感情とは何かについて自らが依拠する理論を明示している。鑑賞者に恐怖を呼び起こす意図を持って作られたフィクションと、それによって引き起こされる恐怖という感情の関わりについて明らかにしようとするとき、感情とは何か、つまり感情とはどのようなプロセスで発生する、どのような性質のものかが問題になるからだ。このことは実際にホラーのパラドクスの重要な論点になりうる。例えば、ベリス・ゴート（一九九三）によるキャロルへの反論は、感情の対象の不快感と、対象の危険性などの否定的評価の混同を指摘している。このことは感情が対象を持ち、対象への評価に関わることを前提としている。この種の議論は感情の正体についての前提が共有されていないことには成り立たないだろう。このようにキャロルの議論にとつて感情とは何であるかは重要なポイントである。しかし、まさにその点においてこの議論は問題を抱えている。そのことを明らかにするために、まずはキャロルが感情というものをどう考えていたのかを確認する。

キャロルは感情について自らが「認知／評価説」と呼ぶ立場をとり、感情には認知による評価的要素と身体的要素が必要であると考えている。ここでの認知的要素は対象への命題的態度と言い換えても良いだろう。例えば、トラッ

クに轢かれそうになり、恐怖することを想定したとき、「トラックに轢かれそうなので、危険である」というのが評価にあたる。評価は命題の形をとって表され、主体が恐怖を感じる時に信念か思考として持っているものだ。そしてこの「自分の置かれた状況が危険である」という信念（または思考）が身体の興奮状態を引き起こすのである。⁴

キャロルは註において、感情についての心理学的な説についてウィリアム・ライオンズ（一九八〇）のものに従っていると明言しているため、ライオンズの説がどのようなものであるかを概説する。

ライオンズは『感情』において因果的評価理論（causal - evaluative theory of emotion）を提示している。感情が発生する仕組みについてはキャロルが述べている通りなのだが、キャロルの主張では省略されているライオンズの主張を含めてこの理論についてここでは説明する。この理論は次の六つの命題によって表現される。

- (1)（この理論は）傾向性として考えられる感情よりはむしろ、顕在的な感情状態についての説明である。
- (2) 顕在的状态としての感情という概念は、その主体における通常とは異なる生理学的変化を引き起こす評価への言及を伴う。
- (3) 私たちが諸々の感情を差異化しているのは、まさに評価的な視点によってである。
- (4) 特定の感情状態という概念は、評価や生理学的変化と同様に欲望を含みうる。
- (5) 中心的な評価的側面は、理性的で合理的な欲望との繋がりを經由して感情的な振る舞いをもたらす。
- (6) 評価を下すことを感情の中心に置くことは、感情に実体がないことや感情が客観的でないことを意味しない。⁵

ライオンズはまず理論の対象とする感情を限定する。感情には傾向的(dispositional)なものと、顕在的(occurrent)なものがある。顕在的な感情は表情や身体変化などの表出を伴う、今まさに発生(occur)している感情であり、この理論の対象である。傾向的感情は、ライオンズとキャロルがともに議論から省いているもので、ある刺激に対して特定の感情反応が見られる傾向にあることを指す。ライオンズの例に従えば、父親の車を傷つけてしまい、そのことについて父親が怒っていることを考えると良い。追加の条件として、父親はテレビを見たり、猫に餌をやったりしていて、怒っている様子を見せていない。しかしこのとき、傷つけてしまった車の話題を持ちかけることで、顕在的な怒りを引き出せる可能性は高いと言えて、こうした場合の怒りは傾向的感情と言われる。この傾向的感情は潜在的なものであるために、それがどのように起こるものかの因果的説明を与えることが困難であり、また、「父親が怒っている」と言うときの典型事例は父親が怒りの顕在的感情を抱いている時であるために、私たちが通常「怒り」と呼ぶものを解明するのには顕在的感情について明らかにするので十分である。これらのことから、ライオンズは顕在的感情に対象を絞って議論を進める。

因果的評価理論において重視されているのは、感情生起の因果的フローである。ライオンズによるとそれは、顕在的感情を引き起こすなんらかの刺激への評価から始まる。例えば、犬が苦手な人が臆猛な犬と対峙したとする。その人は犬を自分にとって危険であると評価する。その評価は、犬から逃げたいという欲求を生む。この評価と欲求が、通常とは異なる(abnormal)生理的状态を引き起こす。そしてこの時の態度に起因する心身相関的状态(psychosomatic state)が感情なのである。また、感情は評価によって差異化される。この主張の背景には、身体反応によって感情

を分類することはできないという考えがある。恐怖している人の間にも、冷や汗をかく人やそうでない人、または手が震える人やそうでない人がいるように、身体反応は感情の指標にならない。恐怖について共有されているのは危険という評価であり、この評価をもとにして、同じく手の震えている人を恐怖している人と怒っている人に分けることができる。

ライオンズの因果的評価理論は、当該書が出版された後に起こった情動理論上の論争を経て、批判的に検討されるべきものになった。それは、情動の認知的評価説に関するザイアンス・ラザルス論争である。

この論争の発端は、ザイアンスが一九八〇年に発表した論文「感覚と思考…好みに推論は要らない」である。この論文でザイアンスは感情の生起になんらかの評価的態度が関わっているという主張に反論した。これに対して認知的評価説を擁護した代表的な論者がラザルスである。ラザルスは一九八三年の論文で最初の反論を行い、一九八四年には両者が立て続けに論文を発表して論争は最高潮に達した。¹¹ 本稿においてはその論争を詳細に追うことはせず、ライオンズの理論に対して重要であると判断できる箇所を強調して紹介する。また、ライオンズの著作が感情(emotion)であつたのに対して、論争の中心は情動(affect)であるが、ライオンズが理論化した対象である顕在的感情がその議論上の性質から、ここでは情動と同一視できるものであるとして進める。

ザイアンスの認知評価説への反論は、一九八四年の論文で五つのポイントにまとめられた。

- 1 情動反応は系統発生的にも個体発生的にも認知に先立つ。¹²
- 2 情動と認知の解剖学的な神経構造は別である。¹³

3 評価と情動はしばしば相関せず関係がない。¹⁴

4 新しい情動反応は明白な評価の関与がなくても成立する。¹⁵

5 情動状態は非認知的で非知覚的な方法で引き起こされる。¹⁶

ザイアンスは五番目の根拠として、薬やホルモン投与や脳への電気刺激または表情を変えることが情動を引き起こしていることを挙げている。こうした場合に情動に評価は介在していない。ラザルスは同年の論文で、最初の四つに關しては反論をしているものの、この五番目の根拠には反応していない。¹⁸ 身体的な操作のみから情動経験を作ることができてしまうことについては反論できていないのだ。このことは、顕在的感情にも評価が必要であるというライオンズの主張に対しても重要な反論になっている。しかし、この点においてキャロルがライオンズの理論を採用することとを積極的に擁護する理由はない。というのも実際のところ、キャロルがなぜライオンズの説を採用したのかは明らかにされていないからである。このことによつて、ライオンズの理論をもとにした「認知／評価説」は、ザイアンスの反論に答えることができない。

加えて、因果的評価理論は、評価がいかに身体的反応を引き起こすのかについては説明を拒否している。生理学的な身体的反応が評価に後続することが、他の要素の介入がなさそうな仕方で見られる場合には、評価が生理学的変化を引き起こしていると主張するに十分であると言える。しかしここにも二つの問題がある。まず、理論の名前とは裏腹に、この主張において評価と感情の間に見られるのは因果関係ではなく相関関係である。次に、評価が発生するタイミングについては内観によつてしか知り得ない以上、生理学的変化との前後関係を正確に知るこ

とはかなり難しい。

以上のことから、ライオンズの理論を基盤とした「認知／評価説」は、情動理論上の論争において擁護し難く、理論としても問題があることが分かる。これが『ホラーの哲学』に関する一つめの問題である。以下ではこの問題を「認知／評価説」の問題」と呼ぶことにする。

2-2 アートホラー概念の問題

二つめの問題は、『ホラーの哲学』への反応に関わるものである。ここで提起する問題は、『ホラーの哲学』で示されたキャロルのホラーのパラドクスの解決法への反論が、ことごとくアートホラーという特殊な感情を捉え損ねているということにまつわる。キャロルの議論は、恐怖や嫌悪ではなく明らかにアートホラーを中心に展開しているし、そう捉えるべきであるというのがこの問題提起の基本的な考えである。ではこのアートホラーとは何だろうか。キャロルは、まずナチュラルホラー (natural horror) との対比からこの概念を導入する。すなわち、環境破壊やナチスによる虐殺など、現実世界の物事に対する恐怖ではなく、小説や映画そしてテレビ番組といったフィクションに対する恐怖としてアートホラーは定義される。また、アートホラーは「特定のジャンルの制作物」²⁰を指示している。今回はジャンル論に立ち入らないので、ここでの「特定のジャンル」は、ジャンルとしてのホラーを指しているとの理解で十分である。

その上で感情としてのアートホラーには、かなり強い定義が与えられている。

「鑑賞者の一員としてのわたし」がモンスターに襲われた虚構のキャラクターの描写と類似した感情状態にあると仮定しよう。わたしが、何らかのモンスターX、例えばドラキュラによって顕在的にアートホラーをいただくのは、次の場合でありかつ次の場合にかぎられる。(1)わたしは何らかの異常な身体的興奮(震え、ぞくぞくすること、叫びなど)を感ずる状態にある。(2)それは次のような思考によって引き起こされている——(a)ドラキュラは存在することが可能である。また次のような評価的思考によって引き起こされている——(b)ドラキュラはフィクションで描かれている仕方で身体的に(おそらく道徳的にも社会的にも)危険であるという性質をもっている。(c)ドラキュラは不浄であるという性質をもっている。(3)この際、通常これらの思考にはドラキュラのようなものに触れることを避けたいという欲求が伴っている。²¹

ここで重要なのは、対象と対象へ向けられる感情である。アートホラーの対象は超自然的なモンスターに限られる。²²この超自然的モンスターに向けられる評価は危険と不浄であり、アートホラーには「認知／評価説」において通常別個に捉えられる、恐怖と嫌悪の二つの感情が混ざり合っている。ここで強調しておきたいのは、アートホラーという概念と、通常の意味での「恐怖」は全く別のものだということである。フィクションのホラーについて考える時に、しばしば現実の物事について感じられる恐怖や嫌悪、つまりは崖から落ちそうになったり、大型犬に追いかけられたりする恐怖や、汚物や苦味といったもののへの嫌悪が、フィクションによっていかに引き起こされているかが考察される。そうした恐怖や嫌悪に、フィクションによる恐怖や嫌悪がどのくらい似ているかは議論の余地があるところだ。しかしキャロルの議論においてはそのことは問題にならない。というのも、現実の物事に対する恐怖はナチュラルホ

ラーとして議論からは退けられるからだ。ナチュラルホラーは現実の物事に対する危険という評価から発生するものだが、ここではアートホラーの条件である不浄は関係ない。つまり、ナチュラルホラーは定義上、嫌悪の感情を含まずとも成立する。反対に、嫌悪の感情は言うなればナチュラルディスガストであり、通常の語の使用としては恐怖とは分離される。²³ アートホラーは「フィクションに対してのナチュラルホラー」のようなものではないのである。同様に、アートホラーを「フィクションに対してのナチュラルディスガスト」であると考えすることもできない。

このようなアートホラーという概念の特殊性は、その対象の狭さを除いてはほとんど注目されてこなかった。その原因は、パラドクスの解決に際して、多くの研究者が神経科学や心理学に訴えているという点にあるだろう。恐怖(terror)の原因や生起メカニズムを追跡する研究はあつても、アートホラーという心理学上の概念はなく、アートホラーの神経パターンを追跡することは提案されない。本稿ではこの問題を「アートホラーの特殊性の問題」として、この概念をキャロルの提示した定義通りに捉える方法を考える。

2-3 パラドクス解決法の問題

前項ではキャロルへの反応が持つ問題点を挙げたが、キャロルの批判者がアートホラー概念を捉え損ねている場合でも、それによつて直ちにキャロルが擁護されるわけではない。例えばベリス・ゴート(一九九三)の言うようにキャロルの「プロットによる認知的快」説は、ホラーフィクションが、それが与える恐怖ゆえに求められているということとを説明しない。²⁴ あるホラー映画が「怖くなかった」ことで批判されるというのは十分に考えられる状況である。キャロルに対するこうした批判は全く正当なものだ。

また、プロットの認知的快に訴える議論は、ホラーフィクションを好まない人を説明できない。例えば、物語の魅力のあるなしに関わらず、ホラー映画というジャンルを好まない人は映画が恐怖を与える部分を嫌っていると考えられる。しかしキャロルの見地では、ホラー映画を好まない人は、プロットの快が恐怖や嫌悪を上回らない、つまりホラー映画のプロットが面白くないと思っていることになってしまう。これはホラーフィクションを好まない人についての正当な説明ではあり得ないだろう。

以上のことから、ホラーの魅力について何も語らずにパラドクスを解消するキャロルの議論は、ホラーフィクションの魅力を捉え損ねているだけでなく、ホラーフィクションを好まない人についての確からしい説明もできない。キャロルによるホラーのパラドクスの解決に問題があるのは、このためである。

3 構成主義的情動理論

本節では、「認知／評価説」の問題とアートホラーの特殊性の問題を解決しうる方法として、構成主義的情動理論を導入する。

「認知／評価」説の問題は、「評価が身体反応を引き起こす」という、キャロルの依拠したライオンズの理論において核心となる主張を現時点で擁護できない点にあった。この問題はアートホラーの特殊性の問題にとっても重要である。というのも、キャロルの定義において、感情としてのアートホラーは危険や不浄といった評価によって発生するものだからだ。もし、感情の生起に評価的要素が関係ないのだとすれば、アートホラーという概念自体が成立しなくなってしまう。

この二つの問題を解決する方法として、本稿では「認知／評価説」に代わる心理学理論の導入を検討する。この理論は最低でも次の二つの条件を満たさなければならない。一つめは、「認知／評価説」の問題であった、情動の生起における評価と身体反応に関する議論に説得的な回答を出せること。つまり、身体反応と情動の因果的な繋がりを説明していること。二つめは、その理論を用いることで、アートホラーが説明できること。つまり、「危険」や「不浄」といった評価がアートホラーにとって必須のものであるという主張を擁護できることである。この二つを満たし、かつ説得的な心理学理論として本稿では構成主義的情動理論を導入する。

この理論は感情とは何かを説明する心理学の説の一つである。この理論はリサ・フェルドマン・バレットを旗手として研究が進められているもので、情動を生得的な刺激―反応モデルによって生成されるものではなく、環境や文化によって影響を受けて作り上げられていくものであることを主張する。大平英樹によると、「構成主義的情動理論はいまだ明確な理論体系として構築されているわけではなく、さまざまな議論がある」²⁵上に、バレットの主張も文献ごとに微妙に変化している。そのことを考慮し、ここでは、バレットが二〇一七年に著した書籍と論文に基づいて理論を、(1)古典的情動理論批判、(2)内受容感覚の解釈、(3)予測的符号化の三つの論点に分けて導入する。²⁶

(1) 古典的情動理論批判

構成主義的情動理論は神経科学に基盤を持つ理論であるが、次のような、神経科学を用いた心理学が則ってきた前提を否定する。その前提とは、ある外界からの刺激が脳において特定のニューロンを発火させ、それによって身体内部に引き起こされた反応が、表情など身体表面においてもある感情として表出されるというものだ。つまり悲しみや怒りなど各々の情動には、その基盤となる神経パターンが存在する、という考えである。しかしバレットによれば

特定の情動に結びつけられる神経の発火パターンは未だ見つかっておらず、情動の身体的指標には一貫性ではなく、むしろ多様性が見られる。つまり、怒りや怖れといった感情に対して、あらゆる神経パターンが見られるのである。

(2) 内受容感覚の解釈

大平（二〇二〇）に従って簡潔にまとめるならば、構成主義的情動理論にとつて情動とは中核的気分状態であるコア・アフエクトの認知的解釈によるカテゴリー化である。コア・アフエクトは身体内部の知覚である内受容感覚に基づいて形成される情動の最も基礎的な状態である。²⁸ 内受容とは、体内の器官や組織、血中ホルモン、免疫系から発せられるあらゆる感覚情報の脳による表象²⁹である。そしてこの内受容に由来する感覚は、快／不快や覚醒／鎮静というように二元的に表現される。

内受容は通常、単純な快、不快、興奮、落ち着きなどの一般的な容態でしか経験できない。しかしときに、激しい内受容感覚の生起を情動として経験することがある。これは、構成主義的情動理論の重要な要素をなす。目覚めているときはつねに、脳は感覚刺激に意味を与えている。それには内受容に関する刺激も含まれ、その結果生成される意味は、情動のインスタンスでもありうる。³⁰

「単純な快、不快、興奮、落ち着き」といった容態で経験される内受容感覚は、同様に二元的な表現が与えられるコア・アフエクトと同一視できる。ここで情動はコア・アフエクトⅡ内受容感覚の解釈なのである。この解釈には、外界の状況としての文脈と、脳内に蓄えた経験の記憶や持っている概念が関わる。この時に重要になるのが予測的符号化で

ある。

(3) 予測的符号化

構成主義的情動理論は脳の働きのモデルとして、刺激—反応モデルを否定し、予測的符号化理論を採用する。近年の神経科学においてさまざまな脳の働きに統一的に説明するための有力な方法として考えられているこの理論において、脳は「感覚器官から入力される刺激に単に受動的に反応するのではなく、将来入力される刺激を予測する内的モデルを構築し、その予測と入力された感覚信号の差異（予測誤差 prediction error）の計算に基づいて、知覚を能動的に創発している」と考えられている。バレットによれば、この内的モデルの形成には経験が役立っている。ある感覚刺激を受け取った脳は、次に受け取る可能性が高い刺激を予測している。そしてこの予測をもとに身体の動作を開始する。そして当然のことながら、この予測には誤差が生じうる。すると脳はその予測を感覚刺激に合わせて調節する。具体的に言えば、「空港の動く歩道が気づかぬうちに途切れていたために歩調が狂ってつんのめった」³² 時などに、予測と訂正のプロセスが発生している。

次のようなエピソードについて考えてみよう。ある人が森を散歩している時に茂みがかさかさと言音を立て、そこから蛇が出てきてその場から逃げ出す。従来の情動理論における説明では、蛇の知覚が怖れの情動を引き出し、逃走という反応を引き起こしたと言えるだろう。また「認知／評価説」の見方では、蛇の知覚に対して「危険である」という評価と「逃げたい」という欲求が生まれ、身体反応が引き起こされ、その感覚が怖れであると言われるだろう。構成主義的情動理論においては、蛇を知覚するところから別の説明がなされる。

ニューロンのネットワークは、「経験するはずの視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚に関するあらゆる情報の断片と、

とるはずのあらゆる行動を予測しようとする³³。この予測に基づいて知覚や内受容が調整される。そこに実際の感覚刺激が入力されると、予測との比較が行われる。予測誤差が生じた、つまり予測と感覚入力が一致しなかった場合、脳は予測を変更したり、反対に予測を感覚入力より優先させたりして対応する。森を歩いているとき、予測の外から（もしくは多数の予測の中でもかなり確率が低く見積もられていた）茂みの音を聞くと、過去の経験をもとに蛇の出現が予測される。これは視覚と聴覚を蛇の出現を知覚するために調整する。同時に逃走も予測され、走って逃げるために心拍数が上がり、血管が拡張することも予測される³⁴。また心臓の激しい鼓動と血液の急激な流れによって内受容刺激が生じることを予測する。その結果、脳は蛇、身体の変化、それによる感覚刺激（内受容感覚）をシミュレートする。その予測は恐怖として解釈される。ここまでではまだ蛇は出てきていない。つまり蛇の出てくる前にすでに恐怖は生まれているのである。そして実際に茂みから蛇が出現すると、逃走は実行されるだろう。

情動は予測された内受容感覚の解釈である。ここで直ちに「怖れ」を感じることができたのは、内受容の不快感を状況や知覚的な類似性から「怖れ」というカテゴリのインスタンスとして経験することができたからである。「怖れ」の概念は、経験や文化または教育によって獲得された「怖れ」のインスタンスの集合であるカテゴリとして存在する。「怖れ」の概念は多様なインスタンスの要約として存在するものであり、³⁵神経パターンなどに訴えた本質主義的な説明ができるものではない。

4 三つの問題を解決する

本節では、「認知／評価説」の問題とアートホラーの特殊性の問題を、キャロルの議論に構成主義的情動理論を導

入することで解決した上で、ホラーのパラドクスの解決法を提示する。ここで「ホラーのパラドクス」ではなく、「キャロルの議論」への導入と述べているのはなぜか、そしてそれはどういうことを指しているのかを明らかにしておく。ホラーのパラドクスは、「恐怖を抱かせるフィクションをなぜ求めるのか」という問いである。冒頭に述べた通り、現在はフィクションの与える恐怖の快に着目して探究されているこの問題を解決するにあたって、アートホラーという概念は必ずしも必要ではない。しかし、本稿において重要視しているのは、キャロルの議論にユニークな概念であるアートホラーを情動概念として保ちながら、ホラーのパラドクスを解決することである。この理由から、構成主義的情動理論を導入するのは「キャロルの議論」に対してということになる。また、それは「認知／評価説」が占めていた位置を構成主義的情動理論に置き換えることを意味する。以上のことを前提として、第二節で挙げた問題の解決に対して構成主義的情動理論がいかに有効であるかを提示する。

4-1 「認知／評価説」の問題

本項では、「認知／評価説」の問題に対して、キャロルの議論の構成主義的情動理論からの捉え直しは有効な手段であることを示す。「認知／評価説」の問題は、キャロルによる理論の選択の理由が明かされず、情動理論上の論争におけるザイアンスの主張「評価なしに情動状態を作ることができる」という主張に対して擁護が困難になったことと、基盤となったライオンズの認知的評価理論が評価と身体反応の因果関係を説明できないことであった。

まず、キャロルの議論のどの部分に、どのような点で「認知／評価説」が重要であったのかを検討する。ライオンズの因果的評価理論の紹介や精査を含まずに提示された「認知／評価説」は、人間の感情についての固定した考え方

であり、また結局のところ、それじたいはキャロルが議論する目的である二つのパラドクスの解決において重要な部分ではない。フィクションのパラドクスの解決は「感情の対象が思考でありうる」ことを示すことによって、ホラーのパラドクスは「プロットが認知的快を与える」ことを示すことによって解決される。この二つのことを示すのに、「評価が身体反応を引き起こす」ことは重要ではない。感情に評価が介在しなくても良いとしても、思考に対する恐怖は評価抜きでは考えられないし、プロットの快にはそもそも恐怖が関係していない。キャロルはパラドクスについての議論を擁護するために「認知／評価説」を修正する必要があるのである。しかし、アートホラーには危険と不浄の評価が関わるため、パラドクスの解決でなくアートホラー概念を再考するためにはこの「認知／評価説」の妥当性には避けて通れぬ問題になる。

まとめると、「認知／評価説」には、「評価が身体反応を引き起こす」という点において反論できない誤りが指摘されているが、しかしその要素は「危険と嫌悪の評価が身体的興奮を引き起こしている」という形でアートホラーの定義に深く関わっている。「認知／評価説」を否定すると同時に、その定義を大きく改変することを避けつつアートホラー概念を再考するためには、評価と情動の関わりを説明できる理論の導入が必要である。こうした背景から、本論では構成主義的情動理論が有効であると主張する。

構成主義的情動理論は、「認知／評価説」の基本的なアイデアである、評価が身体反応を引き起こすという点を否定するが、評価的な要素と情動に関係があることは支持する。例えば、「蛇に outcomes した時の恐怖」について、「認知／評価説」では、危険という評価が先行し、身体反応が生じるとされる。この議論の展開では、評価なしに身体的刺激だけで情動が作れるという反論には応答し難い。他方で構成主義的情動理論においては、身体反応の解釈のプロセ

スに危険という評価が介入し、恐怖が生まれる。さらに、ここで介入する要素は命題の形をとって表される評価だけでなく、脳の予測プロセスによって処理されている身体の内外的からの大量の情報である。この理論の見地からは、評価の先行は必要なく、また身体的刺激による情動の生成についても、刺激の解釈プロセスにおいて評価的要素が介入していることを主張できる。つまり、評価の先行は不必要であるにしても、情動の生成過程には身体の内外的に対するある種の評価が含まれることを擁護できるのである。

以上のことから、構成主義的情動理論の導入によって「認知／評価説」の問題は解決される。

4-2 アートホラーの特殊性の問題

構成主義的情動理論において、情動は内受容感覚の概念的カテゴリー化なのであった。ここで「情動粒度」という考え方が役立つ。バレットによれば、情動は概念の学習によって操作できる。例えばシャーデンフロイデの情動を学ぶことで、シャーデンフロイデの情動経験を獲得できる。状況を概念と結びつけることでより細やかにみずからの情動を検知できるようになるのである。こうして情動の精度を高めることを、「情動粒度」を高めると言う。

こうした背景から、アートホラーもこのように獲得できる情動として捉えるというのが本論における提案である。ここで再度、アートホラーがいかなる感情であつたかを確認しよう。アートホラーの状態にあると言いたい時には、次の条件が必要なのであつた。

- (1) わたしは何らかの異常な身体的興奮（震え、ぞくぞくすること、叫びなど）を感覚する状態にある。
- (2) そ

れは次のような思考によつて引き起こされている——(a)ドラキュラは存在することが可能である。また次のような評価的思考によつて引き起こされている——(b)ドラキュラはフィクションで描かれている仕方である。また次の(おそろく道徳的にも社会的にも)危険であるという性質をもっている。(c)ドラキュラは不浄であるという性質をもっている。(3)この際、通常これらの思考にはドラキュラのようなものに触れることを避けたという欲求が伴っている。³⁶

これらの条件づけを簡潔にまとめるならば、超自然的なモンスターに対して危険で不浄であるという評価が引き起こす身体的興奮を感じている状態にあるとき、人はアートホラーを経験していると言える。キャロルはアートホラーの感情の対象が危険かつ不浄であることに注目することを促す。

モンスターが潜在的に危険と評価されるだけであれば、感情は恐怖(fear)になる。もし潜在的に不浄というだけであれば、感情は嫌悪(disgust)になる。アートホラーは危険と嫌悪という両方の評価を必要としている。³⁷

この部分からは、恐怖(fear)とも嫌悪(disgust)とも過不足なく一致しない、両者を含んだ別の感情としてアートホラーを想定することの必要性が分かる。キャロルにとつて顕在的感情状態にあるというのは、対象への評価が身体的興奮を引き起こしている状態である。そのためここでアートホラーが必要としている評価は危険(threat)と不浄(impure)だと考えられる。つまりアートホラーは危険かつ不浄なものへの、恐怖と嫌悪が混じり合った感情状態であるのだ。

キャロルの基づいていたライオンズの議論が、感情を対象についての受動的な反応であると見ていたことから、アートホラーの感情は受動性に基づいていることがわかる。このことは一見、構成主義的情動理論に反しているようである。というのもこの理論の導入においては感情の刺激－反応モデルの否定が重視されており、概念の習得という能動的なプロセスを必要としているからだ。

そこで、アートホラーを構成主義的情動理論のもとで捉えなおすために、アートホラーの定義において、評価的思考が、身体の興奮を引き起こすと考えられている部分を、「身体の興奮を、評価的思考によって解釈する」と言い換えた。定義に手を加えるならば、次のようになる。

- (1) わたしは何らかの異常な身体的興奮（震え、ぞくぞくすること、叫びなど）を感覚する状態にある。
- (2) それは次のような思考を介して「アートホラー」として解釈されている。
 - (a) ドラキュラは存在することが可能である。また次のような評価的思考によって引き起こされている。
 - (b) ドラキュラはフィクションで描かれている仕方で身体的に（おそらく道徳的にも社会的にも）危険であるという性質をもっている。
 - (c) ドラキュラは不浄であるという性質をもっている。
- (3) この際、通常これらの思考にはドラキュラのようなものに触れることを避けたいという欲求が伴っている。

この定義は、アートホラーにとって重要な、危険と嫌悪という両方の判断が必要であるという点を損なっていない。

その上で、積極的解釈としてのアートホラーという情動を考えられるものになっている。私たちはキャロルの言う仕方でもラーフィクションを鑑賞することで、アートホラーという情動概念を獲得し、それを体験することができる。より具体的に言うと、ムルナウの『吸血鬼ノスフェラトゥ』（一九二二）における吸血鬼や、リドリー・スコットの『エイリアン』（一九七九）におけるフェイイス・ハガーや成長したエイリアンに対して、危険と不浄という二種類の評価を下せることから、自らがモンスターたちに抱いている感じ(feeling)が「アートホラー」であると考えるのである。そうすることで、当該の経験はアートホラーのインスタンスになり、その積み重ねで他の場合の恐怖と違ったものとしてアートホラーという情動概念を獲得できる。このようにして、構成主義的情動理論の導入は、アートホラー概念をキャロルの述べたままに、理論との齟齬なく保っておくことができる。

4-3 ホラーのパラドクスの解決

構成主義的情動理論の視点でキャロルの議論を考え直すことで、ホラーのパラドクスはいかに解決されるのか。まず、フィクションのパラドクスの前提を思いだそう。ここでは、「完全に虚構である」とわかっていることが問題になっていた。ほとんど全ての鑑賞者にとってこの想定は完全に正しいと言えるだろう。鑑賞者は虚構だと完全に分かっているものに対して、特定の情動を経験するためにホラーフィクションを受容している。そして構成主義的情動理論の基礎をなす予測符号化モデルでは、ある状況に対する予測のために過去の経験や持っている概念が用いられるのだ。では『吸血鬼ノスフェラトゥ』の最後に吸血鬼が出てくる場面に恐怖する人のことを考えてみよう。この時、恐怖反応の予測のために用いられる過去の膨大な経験のうちで、散歩中に犬に追いかけられたり、よそ見をしていて危

うく車に撥ねられそうになったりした時の経験が持つ影響力は、『フランケンシュタイン』（一九九四）で怪物がその恐ろしい姿を現したり、『吸血鬼ノスフェラトウ』の前半でこれまた恐ろしい姿の吸血鬼が出てきたりした経験の影響力を上回ることができない。フィクションの鑑賞時に引き出される記憶や概念は、フィクションに関連したものであるほど強力だと考えられるからだ。このことは、車に轢かれそうになった時の「恐怖」のインスタンスの集合と、ホラーフィクションに対する「恐怖」のインスタンスの集合が、これら二つの「恐怖」を同じ語で表す人たちにおいても差異を持つことを示している。

ホラーのパラドクスが存在しなくなるのは、この二つの「恐怖」が構成主義的情動理論の視点で弁別された時である。仮に、ホラーフィクションに対する恐怖のことを「F恐怖」と呼ぶことにしよう。ここでアートホラーを用いるのは、キャロルによる定義の厳しさから分かるように、それがかなり限定的な概念だからである。アートホラーはF恐怖に包含されている。

ここでバレットの主張をもう一つ参照する。それは、同じ身体状態に対しても解釈次第で快／不快の評価のレベルで真逆の情動であると感じられることがある、というものである。情動は感覚入力 of 積極的な意味づけであるためにこのようなことがあり得るのだ。その例として、バレットは頬の紅潮や動悸を介してある男性に感じたときめきの感情が、インフルエンザの症状によって引き起こされた事例を紹介している。恐怖とF恐怖にも同じことが言える。³⁸

F恐怖はしばしば通常の恐怖と似た身体反応を引き起こす。F恐怖が通常の恐怖と混同されて論じられてきたのも、一つにはこのためである。しかし、F恐怖には快が伴う。言い方を変えると、フィクションの作品によってもたらされる恐怖は、それに伴った快とともに学習されているものなのである。ここで、「その快は何によるものなのか」と

いう問いは成立しない。というのもこうした問いは、ある原因に対して快が存在するということを前提としているが、見てきたように、ここで扱っている構成主義的情動理論はそのような議論を否定するからである。ここでは、ホラーフィクションについての恐怖が「準恐怖 (quasi-fear)」であるとしたウォルトンの主張が参考になる。

虚構として悲しみや恐怖を感じる経験は、ヒュームが現実の悲しみや恐怖をそう解したように、「不快で嫌な気持ちになる」ものでもないし、かといって必然的に楽しみとなるものでもない。その経験は、時には好まれるが、時には好まれないのだ。³⁹

構成主義的情動理論は、F恐怖が快とともに学習されている人とそうでない人がいることを説明できる。つまり、ホラーについての選好があることを理論のうちで説明できるのだ。後者の場合はホラーフィクションを単に嫌がり、ホラーフィクションの鑑賞に快があることに對して懐疑的であるだろう。対照的に、前者においてF恐怖はもともと快をもたらし、忌避すべきものではないためパドクスは生じない。構成主義的情動理論を用いたときに、ホラーのパドクスが存在しなくなるのはこのためである。

おわりに

本稿では構成主義的情動理論に基づいてノエル・キャロルの議論を捉え直すことで、三つの課題を解決した。一つめはキャロルの議論における心理学理論の妥当性に関する「認知／評価説」の問題。二つめはアートホラーという概

念がその提唱者であるノエル・キャロルの定義した形では活用されていない、「アートホラーの特殊性」の問題である。これら二つについては、構成主義的情動理論を用いて、アートホラー概念をホラーフィクションの鑑賞時に確かに経験される情動として位置付けることで解決した。三つめは、キャロルの提出したホラーのパラドクスの解決方法が、恐怖そのものの快について語っていない、パラドクス解決法の問題である。これについては、ホラーフィクションによって引き起こされる恐怖を、現実の対象が引き起こす恐怖と分けた上でホラーのパラドクスを解決した。構成主義的情動理論によってホラーフィクションと人間の情動を論じることには、ホラーの鑑賞者の観察や主観的洞察から生み出された概念を、ホラーフィクションの鑑賞経験を豊かにすることに貢献できるものにするという可能性がある。例えば、アートホラーの概念を学習し、鑑賞経験の中でアートホラーがまるで受動的に発生した感情かのように感じるようになったとき、F恐怖から未分化であったアートホラーが自らの持つ情動概念に加わったと言える。そのことは、あるホラーフィクションに対してより多い種類の経験を引き出すことに成功していると言える。また、そのことによってホラーフィクションについての言説も活性化されるはずだ。こうしたわけで、アートホラーについて今行なった理論的な捉え直しは、ホラーフィクションの美学的探究においても重要な意味を持っているのである。

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2148 の支援を受けたものである。

註

- 1 キャロル『ホラーの哲学』、一九七頁。
- 2 同右、一八三頁。
- 3 同右、三五三頁。
- 4 同右、六六頁。
- 5 同右、一一四—一二五頁。
- 6 Lyons, *Emotion*, p. 53.
- 7 *Ibid.*, p. 54.
- 8 *Ibid.*, p. 56.
- 9 *Ibid.*, p. 58.
- 10 *Ibid.*, p. 58.
- 11 Prinz, *Gut Reactions*, p. 33.
- 12 Zajonc, "On the Primacy of Affect," p. 119.
- 13 *Ibid.*, p. 119.
- 14 *Ibid.*, p. 119.
- 15 *Ibid.*, p. 120.
- 16 *Ibid.*, p. 120.

- 17 *Ibid.*, p. 120.
- 18 Prinz, *Gut Reactions*, p. 39.
- 19 Lyons, *Emotion*, p. 61.
- 20 キャロル『ホラーの哲学』、四〇頁。
- 21 同右、六七頁。
- 22 キャロルの議論においては、スラッシャー映画の殺人鬼はアートホラーの対象ではないことになるが、それについてはキャロルの議論がホラーフィクションと通常呼ばれるものに対しては十分に一般的ではないことを指摘するにとどめる。
- 23 「ナチュラルディスタスト」は、アートホラーと現実の物事に対する感情の対称性を考えるための筆者による造語である。
- 24 Gaut, "THE PARADOX OF HORROR," p. 335.
- 25 大平「文化と歴史における感情の共構成」、五頁。
- 26 バレットの議論に入る前に、「情動」と「感情」という論者ごとに異なる基準が採用されており、整理の難しい訳語について本稿における区分を示す。というのも、ここまでに紹介したキャロルらの議論における emotion には、感情という語を当ててきたが、バレット (二〇一九) の訳書においては emotion に情動、affect に気分、feeling に感情が割り当てられており、混乱を招きやすいものになっている。ここでは、構成主義的情動理論を用いる議論に関しては、emotion を情動と訳することにする。また、バレットは feeling と affect の違いを設けていないという訳者による報告に従うが、今回は feeling についてはほとんど触れないので感覚や感じと訳される feeling と情動と訳される affect の違いについては措くこととしたい。
- 27 大平「文化と歴史における感情の共構成」、六頁。
- 28 バレットによる語の使用には変化があり、今回参照する文献においては既にコア・アフェクトという用語は使用していない。大平も指摘するように、コア・アフェ

クトは二元的に表現されていたが、身体内部の信号が多次的で複雑であることで考えが修正されている（大平二〇二〇）。しかしバレットは二〇一七年の時点では、内受容感覚を、コア・アフエクトを介さずに情動の生起に繋げており、内受容感覚についての記述はコア・アフエクトを指しているようにも読める。

29 バレット『情動はこうしてつくられる』、一〇四頁。

30 同右、一一九頁。

31 大平「感情と意思決定を創発する予測的处理」、二二頁。

32 バレット『情動はこうしてつくられる』、一一三頁。

33 同右、一〇八頁。

34 同右、一三四頁。

35 同右、五二頁。

36 キャロル『ホラーの哲学』、六七頁。

37 同右、六八頁。

38 バレット『情動はこうして作られる』、六二頁。

39 ウォルトン『フィクションとは何か』、二五八頁。

参考文献

- Baird, Robert. "The Startle Effect: Implications for Spectator Cognition and Media Theory." *Film Quarterly* 53, no. 3 (April 1, 2000): pp. 12-24.
- Baniniaki, Katerina. "The Paradox of Horror: Fear as a Positive Emotion." *The Journal of Aesthetics and Art Criticism* 70, no. 4 (November 2012): pp. 383-392.
- Barrett, Lisa Feldman. *How Emotions Are Made: The Secret Life of the Brain*. Boston, Houghton Mifflin Harcourt, 2017.
- リサ・フェルマン・バレット『情動はどのように作られる：脳の隠れた動きと構成主義的情動理論』高橋洋訳、紀伊國屋書店、二〇一九年。
- Barrett, Lisa Feldman. "The Theory of Constructed Emotion: An Active Inference Account of Interception and Categorization." *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 12, no. 1 (2017): pp. 1-23.
- Carroll, Noel. *The Philosophy of Horror*. 1st ed. New York: Routledge, 1990.
- ノエル・キャロル『ホラーの哲学：フュクシオンと感情をめぐるパラドックス』高田敦史訳、フィルムアート社、二〇一三年。
- Gaut, Berys. "THE PARADOX OF HORROR." *The British Journal of Aesthetics* 33, no. 4 (1993): pp. 333-345.
- Lazarus, Richard S. "On the Primacy of Cognition." *American Psychologist*, 39, no. 2 (1984): pp. 124-129.
- Lyons, William. *Emotion*. Cambridge Studies in Philosophy. Cambridge University Press, 1985.
- Morreall, John. "Enjoying Negative Emotions in Fictions." *Philosophy and Literature* 9, no. 1 (1985): pp. 95-103.
- Prinz, Jesse J. *Gut Reactions: A Perceptual Theory of Emotion*. Philosophy of Mind Series. Oxford: New York: Oxford University Press, 2004.
- ジエシー・プリンツ『はなわたが煮えくりかえる：情動の身体知覚説』源河亨訳、勁草書房、二〇一六年。
- Smuts, Aaron. "The Paradox of Painful Art." *The Journal of Aesthetic Education* 41, no. 3 (2007): pp. 59-76.
- Zajonc, R. B. "Feeling and Thinking: Preferences Need No Inferences." *American Psychologist* 35, no. 2 (February 1980): pp. 151-175.

- Zajonc, R. B. "On the Primacy of Affect," *American Psychologist* 39, no. 2 (February 1984): pp. 117-123.
- ケンダル・L・ウォルトン『フュクシオンを怖がる』、『分析美学基本論文集』森功次訳、勁草書房、二〇一五年、三〇一-三三四頁。
- ケンダル・L・ウォルトン『フュクシオンとは何か』田村均訳、名古屋大学出版会、二〇一六年。
- 大平英樹「予測的符号化・内受容感覚・感情」『エモーション・スタディーズ』一号、二〇一七年、二一二頁。
- 大平英樹「感情と意思決定を創発する予測的処理」『人工知能』一号、二〇二二年、二二-二七頁。
- 大平英樹「文化と歴史における感情の共構成」『エモーション・スタディーズ』一号、二〇二〇年、四一-五頁。
- 太田陽「サーヴェイ論文 基本情動説と心理構成主義」『Contemporary and Applied Philosophy』二二巻、二〇二〇年、二二一-二五七頁。
- 戸田山和久『恐怖の哲学：ホラーで人間を読む』NHK出版、二〇一六年。
- 戸田山和久「感情って科学の概念なんだろうか」『エモーション・スタディーズ』一号、二〇二二年、九一-一〇四頁。
- 西川秀伸「ホラー映画における『驚愕』のタイプ論：『インシディアス』における『驚愕』シーンの分析を中心として」『Core Ethics：「ア・エシックス」』一六巻、二〇二〇年、一四五-一五五頁。
- レイチェル・ハーツ『あなたはなぜ「嫌悪感」をいだくのか』安納令奈訳、原書房、二〇二二年。